




アドリアン・ヴィジュアル・ロハスによる
蝋燭の灯りと土嚢とサウンドのインスタレーション。
都市最古の建築である教会にて。Photo: Jörg Baumann

 **Amsterdam**

異界へといざなう 最古の建築とサウンド

「アドリアン・ヴィジュアル・ロハス：地球人たちのための詩」展
2019年11月21日 >> 2020年4月26日 アムステルダム、アウデ・ケルク(旧教会)

窓

をふさがれ、闇に閉ざされた巨大な教会。吊るされるべきシャンデリアは、木組みの台座の上に置かれ、蝋燭の火が揺れる。その灯りだけを頼りに進むと、どこからともなく聞こえてくるのが、赤ん坊の泣き声だ。それは笑い声へと変わり、しばらくの沈黙の後に、動物の鳴き声が響き渡る。教会の高い天井に吊るされた28台のスピーカーから流れてくるのは、鳥の羽ばたき、雨音、55の言語で次々と発せられる「あいさつ」、ネルソン・マンデラをはじめとする著名人らのスピーチなどなど。壮大な「音」のコーラージュが、時空を超えた旅へ

といざなう。

アルゼンチン出身のアドリアン・ヴィジュアル・ロハス（1980年生れ）は、これまでサイトスペシフィックな大規模彫刻を各国で発表しており、今回は新たにサウンドも大胆に取り入れた。会場のアウデ・ケルク(旧教会)は、アムステルダム最古の建築物で、7年前から現代アートプロジェクトに取り組んでいる。この地域や建築のリサーチを行ったロハスは、戦時には建築物の保護のために、そして数々の水害でも使われてきた「土嚢」に目を向け、教会内部に積み重ねた。また教会の床石はどれも墓碑であり、下にはレンブラントの妻など多くの人々が埋葬されている。この約3000平米の空間でのサウンド体験は圧巻だ。

教会のある飾り窓地区で、現代美術プロジェクトは新たな文化の発信地となっている。一方で、土嚢の設置による建築への負担を懸念する声もある（主催者は慎重に設置されたと主張）。純粋に教会空間だけを見学したいという人もいる。守るべきものは何か？ 文化の保存と発展とを考えさせられる企画であった。

取材：かないみき